

# 活動報告書

報告者氏名：高野 嘉裕 所属：大分県立宇佐支援学校 記録日：平成25年 2月19日

## 【対象児（群）の情報】

- ・ 学年  
中学部3年生（15歳）
- ・ 障害名  
知的障がい、聴覚障がい、自閉症
- ・ 障害と困難の内容  
道路を歩く際に聴覚障がいということから音による情報が少ないため、交差点や脇道などからの車に対して危険認識が低い。

## 【活動目的】

- ・ 当初のねらい  
自分が歩いていく道を見た時に、危険な部分をあらかじめ予測できるようになることで安全に歩行するという意識を高めることにつながるのではないかと考えた。音による情報を取得することが難しいことから安全に対する意識が持てないということではなく、音による情報以外の力で安全を確認しながら歩くことができるようになることは本人の活動の範囲を広げることになると考えた。学習にあたっては教室での学習を基にしながら学習に使った道路上において、実際に歩きながら iPad で復習・確認を行うようにした。そうすることで学習と実際の場面をつなげた学習がどれくらい効果的なのかを検証した。
- ・ 実施期間  
平成24年4月～ 月に2、3回程度で学習を実施
- ・ 実施者  
高野 嘉裕
- ・ 実施者と対象児の関係  
対象生徒の担任

## 【活動内容と対象児（群）の変化】

### ・対象児（群）の事前の状況

事故に遭ってしまったことから交通安全の学習を始めた。道路の渡り方や歩き方の学習を行ってきたが、学習中に見通しの悪い脇道から出てくる車に気付くことができないことがあった。聴覚障がいという生徒の実態を考えれば、音による情報が少ないことから危険に対する認識が低いことが予想された。大きな交差点などは学習の成果もあり、左右の確認をして車の有無を確認できるようになったが脇道などに対しては注意を向けることができずに通り過ぎるという実態があった。

### ・活動の具体的内容

実際に歩く道路の動画や画像を用いながら危ないところや気をつけるところを知らせるスライド教材を作成。教室でホワイトボードに映したスライドに、危ないところはどこか印をつけながら学習を進めた。同じ教材を iPad の Keynote にも同期させておき、実際の道路上を歩きながら復讐・確認ができるようにした。

### ・対象児（群）の事後の変化

第一段階として脇道に対して確認しながら歩き進めることができるようになったが、確認のために立ち止まる場所が脇道の真ん中であったりしたので、再度スライドを作成し立ち止まる場所なども提示すると立ち位置にも気をつけながら安全確認から歩き進めることができるようになった。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

### ・主観的気づき

交差点に飛び出して車との接触事故に遭ってしまった対象生徒は、道路の右を歩くことや左右の確認ができるようになり、広い一本道だけでなく狭い路地などでも安全確認をしながら歩くことができるようになった。教室と実際の場面での学習の場合、移動などでタイムラグが生じてしまうが、iPadの中に同様の教材をいれて持ち歩くことで教室と屋外の境目をなくすことができたように感じた。

### ・エビデンス（具体的数値など）

今回の学習を行っていく中で気になっていた点は、学習を重ねた場所だから安全に歩くことができるのではないかということであったが、修学旅行中に初めての場所を歩いている時でも右からの脇道に対して安全確認ができたり、保護者と他県へ出かけたときに横断歩道で左右の確認ができていたという報告を受けたりすることで、本人の力となっていることが確信できた。

対象生徒の学習理解を検証するために、日頃学習で歩いている道とは違う道を歩くようにして、「気をつけるところは自分で写真を撮ろう」ということで検証を行ってみた。担任が気をつける必要があると感じた箇所の写真は11枚。対象生徒が撮影した箇所の写真は10枚であった。このことから、危険を予測すべき場所についての理解が深まっていると考えられる。

### ・その他エピソード（画像などを含めて）

この学習と併せて「MAP」アプリを使用しながら設定された場所へ行くという学習も行った。一年間iPadがそばにある環境で生活してきたことにより、インターネットでの検索能力も向上させることができたり、自分の伝えたいことを画像により知らせることができたりするようになってきた。現在は断片的であるこれらの活用をつなげていくことで、自らが行きたいと思った場所に行くことができるようになるのではないかと考え、修学旅行先などでも「MAP」使いながら見学を行った。



交通安全の学習



脇道の安全確認



「MAP」を使って歩く



修学旅行でも「MAP」で見学

今年度の取り組みの中で、家庭との連携には課題が残った。家庭からは、家庭で使用するための「補聴器の乾燥のための手順表」作成や、自宅から最寄りのコンビニエンスストアまでの動画を保護者が行ったりして協力をしてもらったが、教員の連携不足のために十分な活用までに至ることができなかった。将来的にも使用できる支援ツールとするためには家庭での継続的な活用は不可欠であると考えていたが、家庭に対しての情報提供の不足やiPad使用についての説明・フォローが十分にできなかったことが反省点である。